

資料 2016/12/17
第14回日本小児がん看護学会
ポスター発表

小児脳腫瘍多職種チーム研修の有効性



国立成育医療研究センター
看護部¹⁾, 小児がんセンター²⁾

柴田映子¹⁾, 寺島慶太²⁾, 富澤大輔²⁾, 松本公一²⁾

はじめに

小児脳腫瘍は、発症時から神経症状、高次脳機能障害など複雑な症状を呈し、治療後も重大な合併症を残すことが多いため、小児がんの中でもより早期から多職種による積極的な介入が必要となる。小児脳腫瘍患者における多職種チーム医療の質の向上は、重要かつ緊急な課題であり、今回小児がん拠点病院・中央機関の事業として小児脳腫瘍の診療に携わる職員を対象に多職種診療チーム研修を実施した。

研究方法

【方法】2016年2月13日小児脳腫瘍多職種チーム医療研修の参加者に対し、アンケート調査を実施した。
【対象者】小児がん拠点病院および小児脳腫瘍診療を担う医療機関で、小児脳腫瘍診療に携わっている医療従事者。
【倫理的配慮】所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。研修成果を学会等で発表することについて参加者より口頭で承諾を得た。

研修概要

時間	内容
9:10-9:30	受付
9:30-9:35	開会の挨拶・実行の挨拶
9:35-10:05	講演「小児脳腫瘍のチーム医療における各職種の役割」 ○埼玉医科大学国際医療センター 小児がんセンター 脳腫瘍科 医師 鈴木 賢哉 ○国立成育医療研究センター 小児がんセンター 医師 寺島 慶太 看護部 看護士 富澤 大輔 理学療法士 伊藤 正樹 作業療法士 伊藤 真由美 臨床心理士 寺島 慶太 リハビリテーション科 作業療法士 富澤 大輔 臨床心理士 寺島 慶太 臨床心理士 寺島 慶太
10:05-11:05	グループワーク1
11:05-11:20	グループ発表
11:20-11:30	休憩(軽食)
11:30-11:55	グループワーク2
11:55-12:10	講評
12:10-12:15	開会の挨拶

【開催日時】2016年2月13日(土) 9時30分～12時15分

【研修対象者】

- ・小児がん拠点病院および小児脳腫瘍診療を担う医療機関で、小児脳腫瘍診療に携わっている医療従事者
- ・看護師を含む2名以上の多職種チームでの参加職種：看護師、薬剤師、保育士、CLS、心理士、理学・作業・言語療法士、ソーシャルワーカー、脳神経外科医、小児腫瘍科医、リハビリテーション医など

【プログラム】

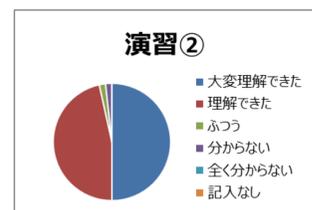
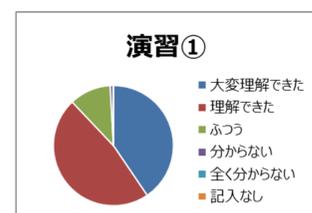
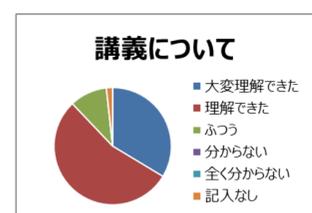
- ・各職種からの講義
- ・演習① 複雑な経過をたどる脳腫瘍の事例をあげ、入院から退院後までに必要な医療について、別々の所属施設の参加者からなる多職種チームを編成、子ども・家族・心理社会面から計画を立案した。
- ・演習② 所属施設毎にグループを再編成し、本研修で学んだこと、自施設で取り組みたいことを検討した。それぞれの成果を他グループに発表し、ディスカッションする機会を設けた。

結果

全国の小児がん拠点病院および関東甲信越ブロックの小児脳腫瘍診療病院から21施設126名(医師30名・看護師39名・薬剤師3名・療法士19名・心理士6名・社会福祉士8名・保育士4名・CLS7名、無回答10名)であった。

演習①では、今回はじめて多職種でのケースディスカッションを経験した参加者も多かった。入院早期から多職種がフラットなディスカッションを行い、具体的な支援・介入の計画を立てるというプロセスを体験した。また、すでに同様の取り組みが行われている施設の参加者同士も、情報交換や交流を通じて今後の新たな目標を得られた。

演習②では、多職種カンファレンスの必要性を施設内の多職種間で共有することができた。とくに、タイムリーな現状把握、目標の統一などを今後の取り組み課題とする施設が多くみられた。研修終了時の質問紙調査では、講義と二つのグループワークについて、大多数の参加者が、5段階中4以上の評価をした。



アンケートの一部抜粋

【講義について】

- ・多職種の役割が明確に説明されていて良かった。
- ・患者・家族・スタッフが治療を進めていく上でチーム医療がとても良いと思った。
- ・成育医療センターの取り組みが理解でき、リハビリ全ケース介入など学ぶことが多かった。

【演習①について】

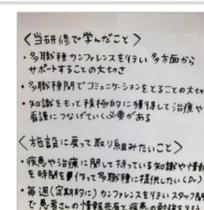
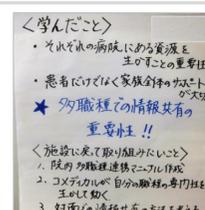
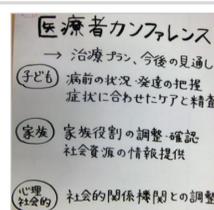
- ・色々な病院でそれぞれの限られた医療資源・職種の中で情報共有ができ、自施設の良い点足りない点がみえた。
- ・多職種のカンファレンスの効果を実感できた。
- ・自分の病院では普段関わりのない職種の方も、他院ではチームの中で活躍していて羨ましいと思った。

【演習②について】

- ・同じ病院でもあまり集まらない職種の人と議論でき、自施設の改善点を整理し、問題が明らかになった。
- ・グループワーク1の情報を自分の病院に役立つものにできた。
- ・ゆっくりディスカッションをする時間がなかなか取れないので有意義な時間だった。

【中央機関に望むこと】

- ・テーマを持って定期的に開催してほしい。
- ・地域でもこのような試みができるように協力をお願いしたい
- ・脳腫瘍は全体的に治療なども不明な部分が多いので定期的に開催してもらいたい
- ・今回のような多職種の人間が集まってより現実に即したディスカッションをする機会を作ってほしい



考察

入院早期から多職種が同時に介入する必要性・方法について講義と演習を用いて実体験してもらうことで、自施設での課題を具体的に検討することにつながった。複数施設の多職種混合編成によるグループディスカッションを通じて、新たな発見やポジティブな刺激を多くの参加者が経験した。アンケートを通じ、多職種カンファレンスの導入および充実という目標が、実現可能であると認識できた参加者が多かったと考える。今後は、同様の研修を小児がん拠点病院が中心になって、各ブロック内で開催できるよう、中央機関として支援していく予定である。

日本小児がん看護学会 COI開示
筆頭発表者名 柴田 映子
演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。